

研究課題：自立支援の観点からみた家事援助の意義と課題

—訪問介護における家事援助サービス利用者の生活実態調査—

大阪府立看護大学

講師 佐 瀬 美恵子

I. はじめに

- (1) 研究目的：家事援助サービスを利用しながら生活する高齢者の実態を明らかにすることによって家事援助サービスの意義と課題を抽出する
- (2) 研究の動機：われわれの先行研究（1999年）から
「ホームヘルプサービス利用者の介護保険制度導入後の生活予測に関する研究」
- (3) 研究の方向性：仮説
 - 1) 家事援助サービスを利用しながら自立した生活が維持できる
 - 2) 家事援助サービスを利用することによってADLの維持が期待できる
 - 3) 家事援助サービスを利用することによって生活の質の確保（向上）が期待できる
 - 4) 家事援助サービスを早期に導入することによって高齢者が自立した生活を長期に維持できる—介護予防効果—
 - 5) 訪問介護員はジレンマを抱えながら援助を行っている
 - 6) 家事援助サービスの質の確保は行えているか

II. 研究概要

1. 高齢者の生活実態調査

- (1) 調査目的：家事援助サービスを利用している高齢者の生活実態を多面的に把握し、高齢者の生活を支えている家事援助サービスの意義と課題を明らかにするために3つの調査を実施
 - ①利用者調査（ヒヤリング）
 - ②利用者ファイル調査
 - ③訪問介護員調査（訪問介護員による利用者の生活状況調査）：訪問介護サービスの提供状況や提供時の困難性を記述
- (2) 調査対象
 - ・宝塚市社会福祉協議会の訪問介護サービスの家事援助サービスを利用している高齢者
 - ・宝塚市社会福祉協議会の訪問介護員

2. 事例検討会

- (1) 目的：個々の事例から、訪問介護員が利用者の日常生活にどのようなかわりをもちながら自立を支援しているのかを分析する。訪問介護員の家事援助プロセスのあり方を検討することや意識を把握することによって、家事援助が自立支援の意図をもってより効果的に実施されるための手がかりを得る
- (2) 検討会の進め方
- (3) 対象事例：家事援助サービスを利用している一般的な事例、利用期間の長い事例、痴呆性高齢者の援助事例、他の事業者（本研究会のメンバーの事業者以外）のサービスも利用している事例、同居家族のいる事例などを対象とした
- (4) 参加メンバー：対象者を担当している訪問介護員、サービス提供責任者、ケアマネジャー
研究会メンバー

3. 訪問介護員調査

- (1) 調査目的：援助を行う訪問介護員の意識を把握することにより、家事援助が自立支援の意図をもってより効果的に実施されるための手がかりを得る
- (2) 調査対象：兵庫県下の訪問介護事業者に所属する訪問介護員：サービス提供責任者とおもに家事援助サービスを提供している訪問介護員各1名。対象事業者 590(1180名)

Ⅲ. 研究結果および考察

1. 高齢者の生活実態調査から

表1 利用開始時期及び期間

	実数	%
介護保険開始前	159	83.7
介護保険開始後	31	16.3
10年以上	11	5.8
8～10年未満	15	7.9
6～8年未満	24	12.6
4～6年未満	42	22.1
2～4年未満	67	35.3
2年未満(介護保険開始後)	31	16.3
合計	190	100.0

表2 年齢(2002/2/1)

	実数	%
65歳未満	8	4.2
65歳以上 70歳未満	12	6.3
70歳以上 75歳未満	28	14.7
75歳以上 80歳未満	42	22.1
80歳以上 85歳未満	49	25.8
85歳以上	51	26.8
合計	190	100.0

表3 世帯構成

	実数	%
単独世帯	110	57.9
夫婦世帯	46	24.2
2・3世代世帯	31	16.3
その他	3	1.6
合計	190	100.0

表4 要介護度

	実数	%
要支援	52	27.4
要介護1	79	41.6
要介護2	20	10.5
要介護3	7	3.7
要介護4	9	4.7
要介護5	3	1.6
N.A.	20	10.5
合計	190	100.0

表5 家事の負担

	実数	%
軽減された	134	70.5
どちらかといえば軽減された	46	24.2
どちらかといえば軽減されていない	2	1.1
軽減されていない	6	3.2
N.A.	2	1.1
合計	190	100.0

表6 訪問介護を利用して(複数回答)n=199

	実数	%
安心感がもてるようになった	105	55.3
人と話す機会が増えた	85	44.7
何かあったときの相談相手ができた	65	34.2
自分の外出の機会が増えた	20	10.5
家族の家事負担が軽減された	55	28.9
他人が家に入るので負担が増えた	19	10.0
家族や近所とのかかわりが減った	4	2.1
その他	14	7.4
特に何も無い	18	9.5
N.A.	2	1.1

表7 援助の方法について

	実数	%
できるだけ自分でできるよう援助	94	49.5
頼んだことはすべてして欲しい	48	25.3
よくわからない	21	11.1
その他	21	11.1
N.A.	6	3.2
合計	190	100.0

表8 在宅生活の希望

	実数	%
できる限り自宅で暮らしたい	80	42.1
身体が動ける間は自宅で暮らしたい	78	41.1
しんどくなったら施設に入る	10	5.3
家族負担が大きくなれば施設に入る	10	5.3
その他	9	4.7
N.A.	3	1.6
合計	190	100.0

高齢者の生活状況：テレビ・ラジオや隣人・友人、家族とのおしゃべりを楽しみに

隣人・友人や家族との会話の頻度や外出の頻度は少なく、閉じこもり傾向

2. 事例検討会から

表9【事例の概要】

事例	事例1	事例2	事例3	事例4	事例5
性別・年齢	女性・89歳	女性・75歳	男性・87歳	女性・79歳	女性・87歳
家族状況	夫死亡後独居 キーパーソンは甥	夫死亡後独居 子どもとは別居	妻入院中のため独居. キーパーソンは嫁	夫死亡後独居 キーパーソンは姪	息子(59歳) と同居
利用開始時期	昭和63年	平成11年	平成13年 (平成7年妻に)	平成6年	平成6年
要介護度	要介護2	要支援	要介護1	要介護1	要介護4
寝たきり度	A2	J1	J2	A2	B1
痴呆度	IIa	なし	IIa	I	IIIa
主な疾患	胃がん・大腸がん・白内障手術、座骨神経痛、糖尿病 もの忘れ	右変形性股関節症(16年前に手術)、右下肢機能障害	右大腿部痛 両眼白内障 記銘力低下	左手機能障害、両膝関節症、もの忘れ	脳梗塞 痴呆
訪問介護の内容	買物・調理・洗濯・掃除	掃除・買物	調理・買物	掃除・買物	排泄介助 調理・買物
訪問介護サービス以外のサービス	デイケア デイサービス ショートステイ 配食サービス	住宅改修 デイサービス	火災報知器の設置	訪問看護 デイサービス 配食サービス 住宅改修 緊急通報	デイサービス ショートステイ
事例報告者	訪問介護員 ケアマネジャー チーフヘルパー	チーフヘルパー ケアマネジャー	チーフヘルパー	ケアマネジャー 訪問介護員 2事業所のチーフヘルパー	チーフヘルパー ケアマネジャー 訪問介護員

事例検討会からみた訪問介護サービスの課題

- 1) 虚弱高齢者を支援する方法論の確立
- 2) 利用者個人を援助する方法論の確立
- 3) コミュニケーション技術の重要性と技術の向上
- 4) 将来を予測したアセスメントと見守り
- 5) トータルに利用者を支援する視点 ー他のサービスと連携し高齢者を支援する
- 6) サービス提供責任者（チーフヘルパー）の役割
- 7) ケアマネジャーの役割
- 8) ケース検討会のあり方

3. 訪問介護員調査から

表10 家事援助の自立支援への役割

	主たる役割であり、十分に考慮すべき	主たる役割であるが、考慮できなくてもやむを得ない	主たる役割ではないが、可能な範囲で考慮	主たる役割ではないので、考慮しなくともよい	無回答	合計
残存能力を活用	358 (64.2)	110 (19.7)	76 (13.6)	2 (0.4)	12 (2.2)	558(100)
自己決定、自己選択への支援	388 (69.5)	79 (14.2)	72 (12.9)	3 (0.5)	16 (2.9)	558 100)
自宅での生活の継続	401 (71.9)	65 (11.6)	71 (12.7)	1 (.02)	20 (3.6)	558 100)
その人らしい生活の支援	405 (72.6)	59 (10.6)	76 (13.6)	1 (0.2)	17 (3.0)	558 100)
地域とのつながりの継続	244 (43.7)	92 (16.5)	196 (35.1)	5 (0.9)	21(3.8)	558 100)

表11 家事援助で難しいと感じること(複数回答)

	n=558	実数	%
利用者の要求の理解		229	41.0
援助計画と違うことを要求されたとき		402	72.0
できるだけ自分で行うよう援助すること		219	39.2
担当訪問介護員間の連携		222	39.8
計画どおりに実施すること		97	17.4
他の専門職との連携		104	18.6
その他		19	3.4
無回答		10	1.8
困難と感じることは特にない		15	2.7

表12 難しさを感じる理由(複数回答)

	n=558	実数	%
経験不足		92	16.5
技術不足		94	16.8
連絡体制が不十分		73	13.1
利用者の理解不足		246	44.1
利用者への説明不足		125	22.4
業務時間が限られている		212	38.0
制度内ではできない援助がある		364	65.2
その他		29	5.2
困難と感じることは特にない		15	2.7

訪問介護員は自立支援という目標を理解しながらも、必ずしも介護度を軽くする方向ではかかわられていない現状があると思われる。また、家事援助の困難な点を解決するために、事例検討会を増やす、利用者に丁寧に説明する、個別援助計画や援助手順書の見直しを行うことと回答している。

IV. まとめ

家事援助サービスは高齢者の地域生活を支えている。訪問介護員は自立支援を意図しながらも顧客満足や制度間の矛盾の中でジレンマを抱えながら活動している。今後の課題として家事援助サービスの質の確保・向上のために、訪問介護員の業務上の困難性に対して事例検討会や研修の確保など制度的な保障も検討する必要がある。